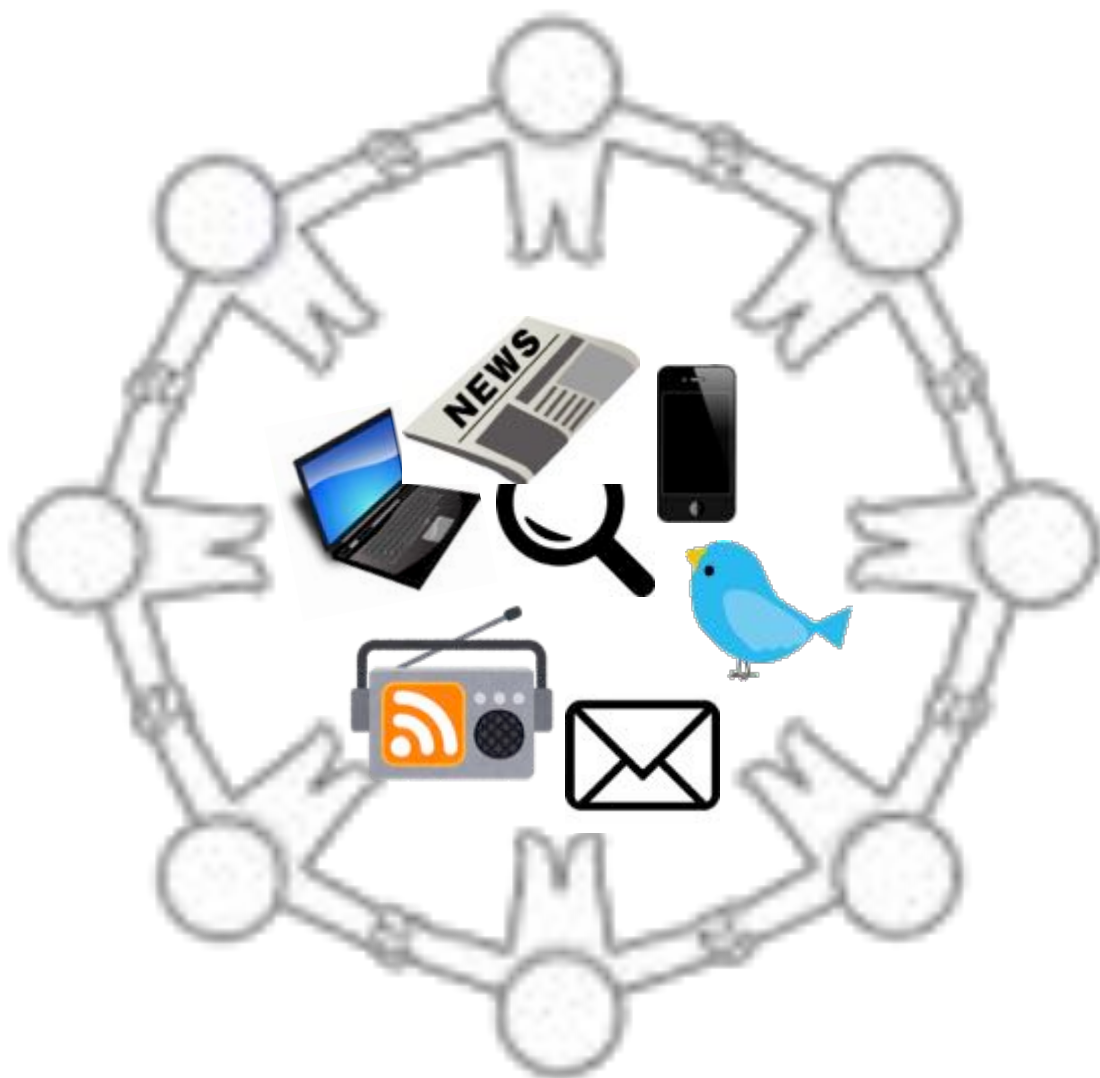


性暴力被害取材のための ガイドブック



2016
**性暴力と報道
対話の会**

ガイドブックの目的

「性暴力と報道対話の会」は

性暴力被害者と報道記者を中心にした対話

の会です。

2015年6月から3、4か月に1回のペースで会合を持ち、性暴力被害当事者への取材のあり方について対話を続けてきました。

性暴力被害は、大きくて複雑な影響をもたらす出来事であり、被害者を取材するときには十分な理解や多面的な配慮が必要です。

しかし、記者は必ずしも適切なトレーニングを受けられているわけではありません。

そのため、性暴力被害者に取材するとき
思わぬ食い違いがおき、傷つきが生まれてしま
うことがありました。

私たちは被害者や記者が**お互いを理解し、**

適切なコミュニケーションをとれるように、

このガイドブックを作成しました。

このガイドブックでは、性暴力被害者と被害者を取材する記者に向けて、取材を受ける
ときの注意点や、取材をするときの配慮につい
て、項目ごとに書いています。

また、取材を受けた**被害者の体験談**や、取材をする側の**記者のケア**についても記載しています。**理解ある報道により、多くの人に性暴力の実態を知って、考えてもらえることを願っています。**

※サバイバー：過酷な経験からの生還者

性暴力から生き延びてきた自分自身をサバイバーと呼ぶ人もいます。

「自分はまだ被害者だ」という人もおり、自称は個人の選択になります。

目次

P. 1 – 4	性暴力被害者・サバイバーの方へ 被害者・サバイバーが取材を受けるときの確認リスト①② 記者の方へ 記者が取材をするときの確認リスト①②
P. 5	取材を受けた被害者・サバイバーに聞きました 「良かったこと」「困ったこと」
P. 6	取材をした記者に聞きました 「学んだこと」「悩んだこと」
P. 7 – 10	トラウマを理解した取材について
P.10	落ち着くための方法 グラウンディング
P.11 – 12	当事者の取材体験 ～取材を受けることのリスクを越えて～ 「それでも伝えたい」から語る気持ちを忘れないで
P.13 – 14	記者の傷つきとそのケア
P.15	若手記者の取り組み 「性暴力取材の3つの壁と取材する力」
P.16	マスコミ管理職の提言 「どんな社会を目指すのか」
P.17	特別寄稿 「公正な報道と思いやり」 北海道警察函館方面本部長 小笠原和美

性暴力被害者・サバイバーの方へ

取材って何？

取材とは、新聞、雑誌、TV、ラジオなどのメディアが「報道記事の題材・材料を、ある事や事件などから取り集めること」（デジタル大辞典）です。

取材には、その時発生した事件を報道する「発生もの」と、原因や対策を深く掘り下げて報道する「テーマもの」があります。被害者に直接取材することあれば、警察などから発表された情報を取材することもあります。取材を受け、報道されることで、社会に向けて訴えられるというメリットもありますし、知られることによるデメリットもあるかもしれません。

取材を受ける、受けないを決める権利はあなた自身にあります。

もし、取材依頼を受けたら、情報を集めて自分にとってよりよい選択をしてください。

取材経験があなたにとってよいものになるよう願っています。

被害者・サバイバーが取材を受けるときの確認リスト ①

取材を申し込まれたとき

☐取材の目的を確認しましょう。

（お互いの目的を納得できれば、認識のズレも少なくなくなります）

☐取材者からは名刺をもらい、所属と名前をきちんと名乗ってもらいましょう。

☐報道される場合は、いつ、どんな内容かを、聞いてみましょう。（時期などが急に変更になることもあります）

☐どのような媒体（新聞、テレビ、ラジオ、雑誌、ネット等）で、どのような趣旨や位置付けで、どのくらいの分量や時間で取り扱われるのかを確認しましょう。

☐何をどこまで話すのが可能か、自分の境界線を明確にしましょう。

☐自分の条件を伝え相談してみましょう。（顔や体の部分を放送されたくない、声を変えてほしい、声や顔を加工してほしい、匿名にしてほしい、実名にしてほしい、新聞・雑誌。記事なら事前に確認させてほしい、ネット掲載してほしいetc.）

☐嫌だと思う、信頼できないと感じるのなら取材を断ってもよいです。

☐自分にとって安心できる・都合のいい場所や時間・付き添い者を選んで話をしたいと記者に相談してよいです。（自分の安全・安心を優先しましょう）

1 ☐この問題に興味を持って取材している理由を聞いてみましょう

記者の方へ

性暴力被害の取材をするにあたって

暴力や犯罪の被害にあった当事者の方は、それだけでとても傷ついた状態です。それでも、私たちはその被害者の方にお話を聞き、記事にして伝えなくてははいけません。二度と同じ犯罪を繰り返してはいけない、という思いがあったとしても、時には上司の「いつまでにこれを形にしろ」というプレッシャーに早く取材せねばと焦ることもあるかもしれません。

しかし、私たちがその方をさらに傷つけることがないよう、相手の尊厳を守り、ある程度の知識をもって、真摯に取材にあたる必要があります。まずは、取材相手が「自分だったら」「自分の家族だったら」ということを常に考えながら、取材にあたることがなによりも大切です。

上司にも随時、取材の進捗状況を報告し、取材の方向性などを相談しましょう。

この冊子では特に、性犯罪被害者の当事者と取材者が何度も話し合いを重ねて、お互いが傷つけないためにはどうしたらいいのかを考え抜きました。

被害者の方にどう接したらいいのだろうか？ そんなときの助けになったら嬉しいです。

記者が取材をするときの確認リスト ①

- ☐取材の目的をきちんと伝えましょう。(個人の勉強目的か、放送や掲載が決まっているか、取材の結果が予測できれば、ズレも少なくなくなります)
- ☐自分の所属や名前を名乗りましょう。
- ☐自分の実績(関連する記事や放送)があれば紹介するといいいでしょう。
- ☐被害者をケアする人(主治医、仲間、支援者、身近な人)がいるか確認しましょう。
- ☐トラウマの影響とその反応について知りましょう。(P.7-10 参照)
- ☐被害者の取材の条件を提示して、相手に選択してもらいましょう。

<条件項目>

- ☐匿名、実名
- ☐個人を特定するかどうか聞く
- ☐撮影部位(顔や声などの加工の希望、体の部位の撮影の有無)
- ☐取材相手の安心できる、都合のいい場所と時間
- ☐第三者に聞かれない場所がよいか
- ☐付き添いの希望(ある、なし)
- ☐インターネットへの掲載の有無

取材申し込み



取材を申し込むとき

被害者・サバイバーが取材を受けるときの確認リスト ②

取材を受けているとき

- 報道するために取材しているので、心がまえとして公に伝わってもいいことだけ伝えましょう。
- 内容を理解してもらえよう、信頼できる記者にオフレコで伝えることもできます。しかし、その情報をどう扱うかは記者にかかっていることを覚えておいてください。
- 聞かれて嫌なことには「答えたくない」と言ってもいいし、したくないことは「したくない」と言ってもいいのです。自宅を写させてほしい、歩いてほしいなどと要望されても、嫌だと思うときは断りましょう。
- 話した内容を自分で確認したい時は、取材内容を録音することも一つの方法です。
- 取材自体をやめてもいいのです。やめる可能性があることについて記者と相談しておきましょう。

報道・発表

- 報道前に連絡がある場合は、心の準備をしておきましょう。
- 新聞などは記事の掲載紙を送ってくれます。伝えられる住所を伝えましょう。TV やラジオは放送部分を記録したものを送ってもらえないこともあります。必要な時は、自分で録画・録音をしましょう。

取材・報道後

- 取材後に、「取材前に自分が言いたいと思っていたことと実際に話したことが違っていった」「言いすぎてしまった」などがあると思います。その場合は早めに連絡して、「あの時はこう言っただけで、間違えた」と伝えて下さい。
- 報道の内容が間違っていたら、取材した記者に伝えましょう。訂正や修正の報道を求めることもできます。インターネットに掲載されている場合は停止を依頼しましょう。記者が訂正や修正に応じない場合、編集部や第三者委員会、読者サービス室に説明や再発防止について申し入れることもできます。
- 取材後は様々な影響があると思います。自分の気持ちを文字や絵で表現する、信頼できる人や、仲間と話す、セラピーを受けるなどをして自分自身のケアに努めましょう。
- ブログや SNS などの媒体で自分の感想や意見を情報発信することもできます。ネットは匿名のコメントや炎上などで傷つく可能性も考え、対応をしていきましょう。
- 周囲の人が否定的な反応をするかもしれません。一人で抱え込まず、仲間や信頼できる人に気持ちを聴いてもらいましょう。

記者が取材をするときの確認リスト ②

取材をしているとき

取材中



- ☐ 言葉を選んで質問し、急がせることなく、ゆっくり時間をかけて相手の言葉を聞きましょう。
- ☐ ト라우マの影響とその反応について知ましょう。(P7-10 参照)
- ☐ 自分の価値観や思い込みの視点がないか点検しましょう。
- ☐ 気持ちが不安定な人もいるため、発言した内容を撤回したいなどの要望があれば適宜、対応しましょう。

報道・発表



- ☐ 掲載日や放送日が決まったら連絡しましょう。急な変更がある時も伝えましょう。急な変更はよくあることですが、事前に「変更があるかもしれない」旨も伝えると、トラブルが少なくなるでしょう。
- ☐ 報道の内容や表現について、上司やスタッフと意見が食い違っても、自分の取材先との約束を守りましょう。

報道・発表

取材 報道後



- ☐ 内容や日時などの急な変更があった場合は、そのことを被害者に説明し、フォローしましょう。
- ☐ 掲載記事や放送した内容は可能な限り、被害者に提供するのとは当然の対応です。その際、被害者の方に報道後の感想を聞いたり、気持ちが不安定になっていないかなどを尋ねるとさらに丁寧です。

取材・報道後

取材を受けた被害者 サバイバーに聞きました

良かったこと

取材を受けたことで
改めて自分の過去を
整理することができた。

記者さんと出会ったおかげで、
当日の事件記事に触れることができた。
幼少期だったため、事件に遭った日を
忘れていた。
日にちを調べてもらい、知ることで、
しっかりと自分の過去とつながること
ができた気がします。

誠実に考えてくれる記者さんたち
と出会えたこと。
ちゃんと関心を持って考えてくれ
る人がいるんだと嬉しかった。

記者さんから質問されたことで、
どうしてそうなんだろう？
どうしてそう思われるんだろう？
と考えるきっかけになった。

困ったこと

フラッシュバックや、
自分の発言と自分の
心情の差に苦しんだ。

記者の方の思い込みが強く、ど
んな話をしても、
「すごくかわいそうな人」
という扱いになってしまった。

性暴力の基本的な知識や、暴力の
の構造に対する理解がなく、
すべてを説明しなければならず、
困った。

報道後、性的に脅すメールや、
いたずらメールがたくさんきた。

取材をした記者に 聞きました

学んだこと

当事者の方とお互いの疑問を話し合うなかで、トラウマとは何かがわかった。

ある程度の知識を持ち、真摯に取材にあたれば、被害者取材を恐れすぎることはないのだとも感じた。

知識も大切だが、社内できちんと引き継ぎ体制を作ることも大切だと感じた。

犯罪を減らすためには、被害者の取材、加害者の取材の両方が必要。
何のために報道するのか、もう一度、意義を考えるきっかけになった。

記者の仕事は、記事になったら終わると思っていたが、その後も被害者の生活は続いていくとわかった。
それを知っているか知らないかだけでも違う。

悩んだこと

具体的に話を聞かないと、事実関係を間違えてしまう可能性があるが、どこまでどう聞いていいのかわからず戸惑った。

上司が手を入れた原稿の表現が、実際とは少し異なっていた。
被害者に配慮した形ではなく、修正してもらうのに苦労した。

個人情報を含め、具体的に伝えてほしいと希望された。
取材後にフラッシュバックで苦しむ被害者もいると聞き、悩んだが配慮して記事にした。

取材チームの中に、取材対象者に偏見を持った人がいて、終始失礼な態度を取っていないかなど気がかりだった。
チームとしてスタッフの人選も重要と思った。

トラウマを理解した取材について

SANE（性暴力被害者支援看護師） 山本 潤

性暴力被害は**心理的にも身体的にも侵襲性が高く、トラウマになりやすい出来事**です。性暴力被害の取材には、トラウマを理解することが欠かせません。

トラウマの一つの指標となる PTSD の発症率が最も高いのはレイプ被害だと言われています。（レイプ被害：女性 45.9%、男性 60%、自然災害；女性 5.4%、男性 3.7%、戦闘；男性 38.8%「Kessler ら、1995」）

トラウマというのは、過去の出来事によって心が耐えられないほどの衝撃を受け、それが同じような恐怖や不快感をもたらし続け、現在まで影響を及ぼし続ける状態¹⁾です。

トラウマを引き起こすほどの恐怖は、日常的なレベルの「怖い思い」とは違い、日常では考えられない思いがけない反応を引き起こします。つまり、トラウマを理解した関わりをしないと、その影響を予測し対応することができません。取材者が心理的ケアを行うのは難しいですが、取材対象者を理解するためにもトラウマの知識は必要です。

トラウマや性暴力の理解については最終頁の参考文献をご覧ください。

ここでは私の見聞きした経験から、取材の中で被害者に起こりやすいことについて説明します。

1. 被害者にもわからない 大きなトラウマの影響

トラウマになるような大きな出来事では、生命・身体上の危機を感じているため、理性的に考える前頭野の機能は抑えられ、生存にかかわる脳の部分が急激に活性化します。「意思とは関係なく手足がふるえだす」「相手の言うことに自動的に従ってしまう」「現実感がなくなり、自分に起こっている事とは思えなくなる」など身体が勝手に反応することもあります。

トラウマ記憶は大方が体に刻まれ脳に残る記憶は比較的少ないと言われ、ストレス系ホルモンによって記憶をつかさどる海馬が機能しなくなることも起こります。このような状態の時に、「何をどう感じていたのか？」「どうして、その行動を選んだのか？」と聞かれても、本人は出来事に圧倒されている状態で、起こっていることを合理的に考え、適切に説明することができません。

被害者がトラウマの影響や、被害に遭った時の気持ちを説明できないことの方が多いということを知っておいてください。専門家と共にトラウマを処理する中で、自分に起こった出来事への理解も進み、語れることは増えていきます。しかし、**回復には段階があり、長い時間**がかかります。取材対象者がどの段階にいるのかということも、意識しておきましょう。

被害者・サバイバー：

自分の状態を知る。どの程度までの取材ならば可能かを、信頼できる人（主治医や身近な人、仲間）と相談し、記者に伝えましょう。

記者：

トラウマの影響について本等で勉強し、専門家にも聞いて理解していきましょう。被害者の状態を知りどこまでの話が可能か被害者と相談しましょう。

2. フラッシュバックとトリガー

トリガー（トラウマを思い出させるきっかけ）によってトラウマ記憶がよみがえる症状がフラッシュバックです。

例えば、無理やり押し倒されて性暴力被害を受けた方の場合、夜寝ようとして横になる時、その仰向けになる時の角度、スピードが押し倒された時の状況と偶然一致することがあります。

そうすると、被害を受けた時の状況が生々しく鮮明にまるでビデオで再現するかのように（しかも、臭いや皮膚感覚などの触覚つきで）最初から最後までその状況を再体験するということが起こります。

これは通常の記憶処理ができていない凍りついたトラウマ記憶が、トリガーによって解凍されるために起こると考えられています。

トリガーは加害者や被害の状況に関連するものが多いですが、**ニュースや新聞の記事、自分自身の被害体験についての話、性的な話題、メディアでの情報など、性被害に関する情報もトリガー**になりえます。

3. 解離について

性暴力被害は、いつまでも続く痛みと共にある体験です。

痛みには

身体の痛み 外傷、妊娠、性感染症、頭痛、腹痛、けがの痛み、倦怠感、性交痛

心の痛み 恐怖、不安、絶望感、自責感、無力感、怒り

失ったことの痛み 大切なもの・人・時間・純粋さ・自分自身の喪失感

感じられないという痛み 解離、感情麻痺、感覚麻痺 などがあります。

このような苦痛から逃れるために、**解離**と言う反応を起こすこともあります。

解離は幅があり、軽い解離から DID（解離性人格障害）まであります。

取材者は、**被害者が「否認」「忘れる」「解離」**することがあることを覚えておいてください。

被害者・サバイバー：

何がトリガーになるか把握しておくとその場で対応しやすくなります。解離やフラッシュバックが起こりそうになったら、今、目の前に見えるものや聞こえるものに注意を向けましょう。「グラウンディング」^{P.10}も有効です。

記者：

治療者や仲間、支援者など被害者を支える人がいるかを確認しましょう。被害者の安全・安心を守れるように配慮しましょう。取材中に被害者が解離している時は目を開けてもらい今見える物に注意を向けてもらいましょう。

4. 周囲の反応について

1) 身近な人の反応

動揺、怒り、否認といった周囲の反応は、被害者への否定的な影響をもたらします。

「なんでわざわざ自分のことを話したのか」

「もう忘れなさい」

「二度と取材は受けないで」

などと言われる被害者もいます。

大切なのは被害者自身の気持ちです。

自分を責める反応が起こるかもしれませんが、否定的な反応をする人は、自分の考えや思いを言っているだけであり、それは被害者であるあなたの問題ではないことを理解しましょう。

被害者・サバイバー：

自分の気持ちを理解し、支えてくれる人に話すことでよかった面にも注目できます。取材を受け、報道されてよかったことに注目しましょう。

記者：

身近な人から否定的な反応をされることで、取材対象者が揺れ動く可能性を理解しましょう。

2) インターネットの影響

インターネットの中で、プライバシーを侵害されたり、根拠のない内容が書き込まれてしまうことがあります。傷ついた場合は自分自身のケアをしましょう。感じたことを仲間や信頼できる人と共有することも有効です。その後の対応については、支援者や専門家などに相談してみましょう。

インターネットに掲載されたすべての情報を削除することは難しいことです。しかし、法律違反のケースやプロバイダーに削除を求めることもできますのでネット被害に詳しい弁護士や、NPO 団体に相談してみましょう。

(インターネットホットラインセンター <https://www.internethotline.jp/>)

5. 記者さんへのお願い

「話したくないことは話したくないと言ってください」「記事にしてほしくないところは配慮します」という言葉を記者さんからかけてもらえると、被害者としては、とても安心できます。

「なぜ」「どうして」という言葉を極力使わないようにしているという記者さんもいます。言葉にならない感覚として性暴力被害を体験している被害者は、経験をうまく説明することがなかなかできません。

「なぜ、その時間にその場所にいたのか？」という何気ない質問にも、(その時間にその場所にいた自分が悪い)と自分を責めてしまい傷ついてしまう被害者が多いと感じます。

「なぜ」という、答えが広がりやすい質問ではなく、「**その場所に行くことになった理由を教えてください**」「**どういう経過で行くことになったのか教えてください**」という具体的な質問の方が、被害者が混乱せずに答えられるでしょう。

どのように配慮したらよいのか悩まれるかもしれませんが、恐れすぎることなく人間としての敬意をもって接してもらえれば気持ちは伝わると思います。

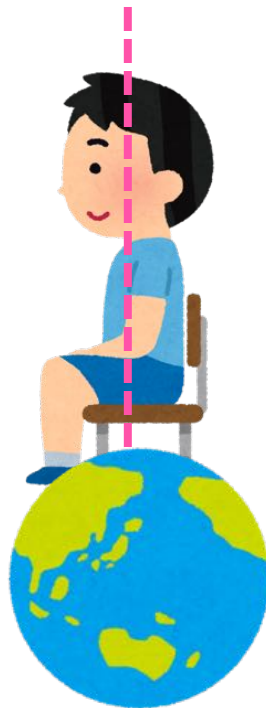
性暴力被害の特徴を踏まえ、事実を伝えられる報道が広まる事を願っています。

落ち着くための方法 グラウンディング

「グラウンディング」とは、英語の「グラウンド」つまり「大地」に由来する言葉で、大地にしっかりと自分自身の根を張り、今ここにあることを実感する、という意味があります。

【グラウンディングの方法】

1. 椅子に腰をかけ、頭のとっぺんからひっぱられているような感覚で背筋を伸ばします。
2. 足の裏を床につけ、背筋を通る一本の線をイメージします。
3. その線が、股の間の部位から身体の外に出て、地球の真ん中につながっていることをイメージしてください。
4. 地球と一体になった感覚を味わいながら、深い呼吸を繰り返して下さい。





～取材を受けることのリスクを越えて～

「それでも伝えたい」から語る気持ちを忘れないで

SIAb. けいこ

私は、近親者からの性暴力被害の当事者（以下、当事者）です。

2007年の4月から、性虐待被害によるPTSDの専門的な治療を受け始め、2009年11月以降、主治医に許可を得てから取材を受け始めるようになり、その後も自分の精神状態や取材内容を相談しながら、今までに新聞やTV、支援機関からのを含め10回以上の取材を受けてきました。

取材を受けながら、生育歴や被害体験、回復過程を語ることで、過去が明確化し、外在化されることで第3者の視点で捉えられ、自分の過去や現在の自分としっかりと向き合うことができました。結果的に、取材を受けることで『一歩先に進めた』と感じられ、有意義であったと思っています。

ただ、それは信頼できる人や場所、治療者や支援者たちと繋がっていたからこそだと思います。前述のような良い面もあれば、時には副作用的な負の作用が起こる可能性もあるので、そのリスクを最小限に抑え、より良い状態で取材が行われ、世の中に誠実な情報を発信し続けていけるよう、当事者側と取材側、双方で話し合いながら取材を進めることが必要だと考えています。

いちばん伝えたいこと

私は3、4歳頃から性虐待を受け始め、自分の感情や言葉を、押し潰して生き抜いてきました。

そのせいか、感情を言語化したり、感情のコントロールが上手くできないという大きな問題も抱えていました。ですので、当初は取材後しばらくしてから「うまく伝えられず悔しい」「しゃべり過ぎて恥ずかしい」や、また「語ったことが嘘のように感じる」などの負の感情が湧いてきて、その大きな起伏に翻弄され、精神的に追い詰められ、時には体調を崩して寝込むこともありました。

時には、その負の感情が自分や他者への怒りへと変化し、自分や他者に対して暴言や暴力を振るうなど、攻撃的になったり、不信感が大きくなって人を避けるようになったりもしました。

この他にも、当事者が取材を受けた場合に起こりやすい問題として、取材で親身になって聴いてくれた人や、自分を理解してくれたと思えた人に依存的になることがあります。また、それを拒否されることで攻撃的な行動をとってしまう可能性もあります。

以上のことも併せて、いちばん伝えたいことは、当事者の多くがこのような葛藤に満ちた揺らぎやすいパーソナリティー傾向を抱えている可能性が高く、取材者はもちろん当事者自身も認識が必要だということです。お互いの安心・安全のために、事前の打ち合わせや取材後のフォローアップ、取材を受けられる状態なのかどうかの確認、できればアフターケアのために医療機関や支援機関に繋がっている、または可能かなどの確認を心がけていただきたいです。

SIAb. (Survivors of Incestuous Abuse/通称：シアブ)

近親姦虐待被害に特化したピアサポートグループ。2013 年発足。SIAb.プロジェクトを企画。

当事者たちの語り合う姿を動画配信したり回復に向けての情報配信している。(URL : <http://siab.jp>)

実例として知ってほしいこと

ケース 1) 「自助グループの活動について」という内容で所属団体の事務局を通して取材依頼があり、被害内容にも質問がおよび、2 時間近く自分の半生を語りました。しかし、連絡先を交わしたにもかかわらず、「今回は、主旨から外れるので掲載を見送らせていただきました。」と事務局にだけ連絡が入り、直接の連絡も説明もありませんでした。

ケース 2) 講演会場で体験談を話した後、簡単なプロフィールなどを訊かれ、「記事にしたいので原稿ができたなら確認をお願いします。」と言われましたが、連絡のないまま記事は掲載され、内容には何箇所も誤りがありました。

ケース 3) 報道番組の 5 分程度の特集や、新聞のスポット的な記事では、後から付けられた「お題」に合わせたセンセーショナルな被害内容のみが報じられたことが、4 回の取材のうち 3 回あり、また、「まだ世間には受け入れられないのでは？」とのインタビュアーの上司の判断で、ボツになったこともありました。

ただこの時は、放映直後に状況や理由を真摯に説明してくたり、心や体調を気遣ってくれたり、「この問題は絶対に埋もれてはいけないと思うので、どうか今後も取材を続けさせてください」など、熱意が伝わる言葉が聞けたので、納得もできましたし安心もできました。

当事者が性虐待の被害体験や半生を語るということは、かなりのリスクが伴います。なぜなら、被害体験を想起することで再体験している状態になり、フラッシュバックや、原家族^{※1}に対する罪悪感に悩まされ、精神的に不安定になる場合が多いからです。

このような罪悪感についてはあまり知られていませんが、当事者は被害者であるだけでなく、長年、被害を隠蔽してきた加害者でもあるという意識を抱くこともあるのです。また、原家族や、婚姻などで増えた家族をも巻き込んで晒し者になっている、自分だけ被害者ぶってメディアで発言している、などの自責念にかられることもあります。

ケース 1～3 のような場合、当事者にとっては、被害を訴えたのにそれが「隠蔽」されたり、「事実を捻じ曲げて」取り扱われたこととを感じる場合があり、それは虐待が行われた家族や関係者からの“2 次被害の再体験”をしているのと同じことだという認識を持っていた欲しいです。

それも覚悟の上で、「それでも伝えたい」と、語る選択したことをどうか忘れないでください。

※ 1 原家族：その人の生まれ育った家族

記者の傷つきとそのケア

SANE（性暴力被害者支援看護師） 山本 潤

事件現場で死やひどい外傷の現実を目の当たりにしたり、遺族の慟哭や喪失に触れたり、被害者の辛い話を聞いたりする中で、報道記者も傷つくことがあります。「外傷体験を負った人の話に耳を傾けることで生じる被害者と同様の外傷性ストレス」を二次受傷と言います。代理受傷、惨事ストレスも含まれます。

【代理受傷とは】

代理受傷は被害者と共感的にかかわることで援助者の内的な世界観が変容することです²⁾。

- ・ 侵入的な視覚イメージ（被害者の体験のシーンが頭に浮かぶ）
- ・ 被害者の体験に対して強い恐怖や不安が生じる
- ・ 支援者の内的な世界観の変化
- ・ 身体的不調や苦痛 (D・H・スタム「二次的外傷性ストレス」)

などが代理受傷の症状です。

心が傷つく中で感覚の感度を下げて対応しようとしたり、ただ命じられるままに仕事をこなそうとすることもあります。しかし、私たちは人間であり、その人間であることで、被害者と人間性を触れ合わせより深い経験や感情、事実を理解することができると思います。

「記者は、まず人間であり、同時に記者にもなれる。その逆はない」³⁾

との言葉にあるように人間である自分自身を大切にしてほしいと思います。

【惨事ストレスとは】

職務を通じて、日常的にトラウマを引き起こすような出来事（災害や犯罪、虐待）やその被災者に接する事で生じるストレスの一種が惨事ストレスです。次のような症状がみられることがあります。

① 解離症状

- ・ 呆然としている、記憶が途切れている。感情がわからない。

② 再体験症状

- ・ 当時の場面が何らかのきっかけでよみがえり、嫌な気分になる。出来事に関する悪夢を見る。

③ 回避症状

- ・ 出来事を思い出すような人、場所、状況を避ける。これまで楽しんでいたことを避ける

④ 覚醒亢進症状

- ・ 眠れない、イライラ。過敏、過剰に用心深くなる

- ⑤ 自責感・生き残り罪悪感（サバイバーズギルト）
 - ・できなかったことやしなかったことを必要以上に後悔する
 - ・自分が生き残ったことを責める
- ⑥ 組織や仲間に対する怒りや不満
 - ・これだけ～したのに組織は守ってくれない
 - ・こんな思いをしているのに誰もわかってくれない
- ⑦ 仕事に対する意欲の低下
- ⑧ その他 アルコールの多飲、依存、うつ

海外では、トラウマや紛争や惨事に関するマスコミ報道の改善のために創設されたダートセンターのような機関があります。ジャーナリストやジャーナリズムの教育者、健康の専門家の世界的なネットワークを構成しています。

ウェブサイト（<http://www.dartcenter.org/>）を通じて、惨事の取材に関わる倫理的問題や外傷性ストレスについて、ジャーナリスト向けの情報提供を積極的に推進しています。ジャーナリストが自らトラウマとその対処等について学ぶことの出来るページ（Online Self-Study）も用意されています。加えてダートセンターでは、惨事関連の優れた記事・報道に対する賞（award）、およびジャーナリストに対するフェロウシップ（fellowship）も提供しているとのこと。（ジャーナリストの惨事ストレス、― Dart Center 調査からみた海外でのストレス対策の動向―）

このような海外の取り組みに学ぶことも、今後あるかもしれません。

被害者への対応

二次受傷以外にも、注意が必要なのは被害者への対応です。

被害者が不安定な状態にある時、自分をコントロールできず、依存的になってきたり、記者に対してストーリー行為をすることも考えられます。被害者の状態を治療者や支援者に伝えて、適切な対処をしましょう。

二次受傷の対応策

個人にできる事	組織で行う事
その人が弱いから起きるのではないと理解する 守秘義務は守りながら、わかってくれる人と話す 自分の限界を超えない⇒ひきつぐ 趣味、ストレス解消の時間を持つ 仕事とプライベートを区別、私生活を大切にする ユーモアを大切にする	サポート体制を整える 業務管理、適切な休養 必要時は、質の高いスーパービジョンを受ける 正しい知識と情報を得る トレーニング研修を提供する

若手記者の取り組み

性暴力取材の3つの壁と取材する力

T V 報道局 S・M

性犯罪被害に関する取材は、ひと言でいうと「ハードルが高い」と感じる。

第1の壁は、「警察の壁」。警視庁捜査1課の担当を始めて間もなく起きた三鷹のストーカー殺人事件。女性が性犯罪に巻き込まれることに対する怒りと悲しみを経験した。二度と同じような犯罪が起きてはならない、その一心で取材にあたるのだが、そのたびに警察官から出てくる言葉は「性犯罪だからプライバシーを守るために何も話せない」という言葉。取材者として、何度も無力感を味わった。

第2の壁は、「メディア側の壁」。性犯罪は難しい、視聴率がとれない、一般の人は興味がない…などといって表現をおさえたり、放送しなかったりと、どんな犯罪が起きたのかきちんと伝えられないもどかしさを感じることが多い。

そして第3の壁は「当事者の壁」。性犯罪被害にあった当事者の方に直接お話を聞きたいと思っても、どうアプローチしていいのかわからない。通常の事件のように発生場所がわかることもなく、被害者がわかることもない。支援施設に連絡しても、「紹介することはできない」と言われる。

ようやくたどり着いても、ペン取材なら受けてもいいがテレビは無理だと言われる。一方で、上司からは放送するにはインタビューが必須だと言われる。性犯罪を伝えることは、取材者にとってとても壁が高いと感じている。

しかし、そこで諦めてはいけない。性犯罪とはどんな犯罪なのか、「トラウマ」とは何か。どんな取材でも共通すると思うが、大切なのは「相手のことを理解しようとする」こと、その1点に尽きると思う。特に性犯罪の取材は「配慮」とともに、ある程度の「知識」が必要だとも感じる。個人的には、「性犯罪＝尊厳を奪われる犯罪」ときちんと理解できたとき、取材の糸口が見えた気がした。

この冊子が、少しでも取材者にとって「配慮の気持ち」とともに「知識」を身につけられる冊子になることを願う。

マスコミ管理職の提言 どんな社会を目指すのか

毎日新聞社 本橋由紀

感じ方、考え方、見方……、私たちはみんな違う。言葉を尽くしても通じないことはある。けれど、語り合わなければ互いの違いも理解できない。

「性暴力と報道対話の会」に「マスコミの管理職」の立場に関わってほしいとお誘いを受けた。折しも、私は記者に対する研修を担当している。そこで、「せっかく取材を受けてもボツになることがある。上の人が『社会が受け入れられない』と言うなどの理由で」と聞いた。 瞬間、「抗議でしょ！」と叫んでいた。

潤さんから翌朝すぐ、メールがあった。「被害者としてとても引け目を感じながら生きているので、大マスコミの発言に納得できない苦しみはあっても反駁できない。叩き潰される経験をした被害者は無力感に支配されていることが多いから、抗議することは当然の権利だと伝えられることはとても力になる」「被害の経験から、他の人との関係でも対等にモノを言えば、また何かをされるのではないかという恐怖心が宿っている」という。あらためて、被害の深刻さを思い知った。

ボツになるネタはある。だが、「魂の殺人」とも言われる性暴力という過酷な被害を受け、心の自由を奪われ、無力感にさいなまれる経験をしている人が、その苦しみ、哀しみを乗り越えて話をする。それにはどれだけの勇気とエネルギーを必要とするのか。

想像力をはりめぐらせて向き合うのが礼儀だろう。記者である前に「人」として。

取材後、上司を説得する材料をそろえたのに、上司が首を縦に振らなかったのかもしれない。だからといってそんな上司の言葉をそのまま伝えるようでは取材相手に対する「誠意」は感じられない。相手と同じくらい準備して、心に決めて取材したというのなら、最後までその「志」を貫こうよ、と取材者の背中を押したい。

そもそも、「社会が受け入れられない」とはどういうことか。社会が受け入れられない出来事を被害者は個人で背負っている。取材してその事実を知ったのに、その現実を許す社会を放っておいてはいけない。私たちはそれぞれが尊重され、自由であるために働いているのではないか？ 性暴力を報じるとき、我々がどんな社会を目指すのか、自分の根本的なスタンスが問われる。

この重いテーマについて、被害を受けた方たちが覚悟をもって「この悲劇を繰り返さないように」と発言を始めている。性暴力という非道な犯罪を食い止めるために私たちができることは取材し報じることだ。勇気を奮い立たせる被害者と報道側が、考えを伝え合おうとして始まったこの会がどのように育つのか、社会が変わるのか、報道に携わる私たち自身にかかっている。

人々はマスコミ報道を通じて事件を知ります。事件・事故を追う報道記者たちは、即時対応できるよう常に緊張感を強いられ、各社横並びのスタートでスクープ合戦の渦中に放り込まれることもしばしばです。

そんな彼ら彼女らにとって重要なニュース素材の一つが「当事者の生の声」です。特に若手の記者たちは、事件の関係者に話を聞けるまで、時には厳寒の戸外で取材相手を待ち続けた、たった一言のコメントを得るために粘り強く何度も何度も足を運びます。その努力は涙ぐましくもあります。

【両刃の剣】

なぜその事件が起きたのか、なぜその人であったのか、背景にどのような問題があるのか。**報道に携わる記者は、「社会の病巣にメスを入れることが報道という公器の正義である」との信念を持ち、真相に迫る努力をしています。**それはとても頼もしいことですが、**取材者が熱心に真相を求めるあまり、そうとは気づかぬうちにそのメスが取材対象者を傷つけてしまうこともあります。**

【当事者の声を聴く】

「和美さん、マスコミの人って取材のプロですよ。教育受けてるんですよ。だったら、どうして皆さん、基本的なことを聞いてくるんですかね。取材受けてて疲れちゃいました。」

「う～ん、そっか、、、じゃあ、その言葉、直接記者さんにぶつけてみる？」

このガイドブックは、性暴力被害経験を持つ取材対象者のこのような素朴な疑問に端を発し、**性暴力という深刻かつ重大な社会問題について公正な報道をしてもらうために、取材する側において必要な配慮を知ってほしい**という切実な願いから生まれました。

【避けられない負担への配慮】

正義を実現するために自分たちが手にしているメスが被害者を傷つける可能性があることを自覚し、相手を思いやることの大切さは、警察捜査にも通じるものがあります。被害者からの事情聴取は避けて通れない。だからこそ、負担を軽減するための配慮を最大限する必要があります。

このガイドブックを作ろうと立ち上がり、身を削るような思いをしながら貢献して下さった性暴力サバイバーの皆さん、悩める子羊のように取材時の葛藤や疑問を打ち明けてくれた報道記者の皆さん、そして貴重な意見をくれた敬愛する報道機関幹部諸氏に心からの感謝と敬意を表します。

この冊子が一人でも多くの取材者の手に届き、重篤な人権侵害である性暴力の実像が公正に報道されることを願っています。そして、捜査に携わる全国の警察官にも一読を勧めたいと思います。

【引用文献】 いんようぶんけん

- 1) 宮地尚子著「トラウマ」岩波新書,2013
- 2) D・H・スタム著「二次的外傷性ストレス」誠信書房,2003
- 3) 高橋シズエ・河原理子著「＜犯罪被害者＞が報道を変える」岩波書店,2005

【参考文献】 さんこうぶんけん

宮地尚子 「トラウマ」岩波新書, 2013

「環状島＝トラウマの地政学」みすず書房,2007

ジュディス・L・ハーマン 「心的外傷と回復」みすず書房,1999

中島幸子 「マイ・レジリエンス」梨の木舎,2013

大藪順子「STAND 立ち上がる選択」フォレストブック 2007

シンシア・L・メイザー K・E・デバイ「あなたに伝えたいこと」誠信書房,2015

藤岡淳子「性暴力の理解と治療教育」誠信書房,2006

森田ゆり「子どもへの性的虐待」岩波新書,2008

河原理子「犯罪被害者 いま人権を考える」平凡社新書,1999 年

本書の著作権は【性暴力と報道対話の会】に属します。
商業目的での利用等は著作権法上の例外を除き禁じられています。

2016 年 12月

性暴力と報道対話の会